

マイ・ブラザー

2005(平成17)年6月19日鑑賞(心齋橋パラダイスクエア)

★★★★



監督・脚本=アン・クオンテ/出演=ウォンビン/シン・ハギョン/キム・ヘスク/イ・ボヨン/チョン・ホビン (UIP 配給/2004年韓国映画/113分)

……兄弟の確執は、古今東西を問わずどこにでもあるもの。今、日本全国を吹き荒れている兄弟の確執は、父貴ノ花の死去に伴って発生した「若貴戦争」だが、これはあまり「目にしたくないもの」……？ これに対して『マイ・ブラザー』での兄弟の確執はかわいいもの……？ 兄は学業優秀、弟は暴れん坊、しかし実は……？ 幼年時代、高校時代、そして大学時代を経る中、「1人の母親」をめぐる2人の確執は……？ そしてラストに向けて発生する大事件は……？ 前宣伝の少ない比較的地味な韓流映画だが、とりわけ男2人の兄弟諸氏には、我が身を振り返りながらじっくりと味わってもらいたい作品だ。

あなたはどう見る、「若貴戦争」？

「兄弟は他人の始まり」とはよく言ったもので、古今東西、権力を巡る兄弟の確執はもちろん、1人の女や財産を巡る兄弟の確執劇は至る所に存在している。そしてこれは、自分の問題になると大変だが、「他人事」であればその争いは見ていて面白いもの……？

そんな週刊誌的、ワイドショー的な目で、現在日本列島に、吹き荒れているのが「若貴戦争」。5月30日に死亡した名大関貴ノ花は、「父子関係」を封印し、師匠・弟子関係を貫徹する中で、2人の息子をともに横綱まで出世させるという偉業を成し遂げた。しかしその晩年は、妻藤田憲子さんとの離婚や2人の息子の兄弟ゲンカその他さまざまな厳しい現実と直面することになった。そして55歳という「若すぎる死」の後、とりわけ6月13日に行われた協会葬の後は、皆さんご存

知のと通りの「若貴戦争」の勃発だ！

大横綱の風格で、あくまで寡黙だった弟の貴乃花は、ここ1週間程はテレビのワイドショーに出ずっぱり。そして、兄若乃花に対して、「堂々とテレビに出てきて反論しろ！」と挑発している姿を見ると、事の当否は別として、いかにも哀れと思えてくる……。

これは弁護士として31年間、さまざまな遺産分割や離婚事件の中での兄弟ゲンカや夫婦ゲンカの実態を見てきた私だけの感想かもしれないが……。

さて、あなたはこの「若貴戦争」をどう見る……？

慎太郎と裕次郎は？

若貴戦争が今が旬（？）なら、昭和を代表するもっとも理想的な兄弟が石原慎太郎と裕次郎の兄弟！ 少なくとも私たち一般人には、この2人の兄弟ゲンカや確執が伝えられたことは1度もない。もっともこれは、裕次郎が1987年に亡くなったため、すべてが美化されているからかもしれないが……？

慎太郎の書いた小説『弟』は1996年に出版されたが、一方の当事者が死亡しているケースは何でも書きやすいかも……？

石原慎太郎の息子たちは、伸晃、良純、宏高、延啓の4人。現時点では、子供と父親との確執も兄弟間の確執もなさそうだが、さて、あと10年後、20年後は……？

昨日6月19日のテレビ番組『週刊えみい SHOW』にゲスト出演していたテレビタレント、気象予報士の石原良純は、兄の政治家伸晃を称して、「大臣には誰でもなれるが、気象予報士は資格がないとなれない」などと冗談めかしてしゃべっていたが、司会の上沼恵美子の「石原家をもめたら面白いでしょうね……」という発言は誰もが言わないけれども、思っていること……？

秋山兄弟は？

私の大好きな司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』は、今年2005年が日露戦争100周年という年にあたることもあって、再び脚光を浴びている。その出身地松山市においては、『坂の上の雲』にもとづくまちづくりをテーマとしてまちづくりが

進められているうえ、秋山兄弟記念館の建設も……。もちろんこれについては、「戦争賛美になるのでは……」という意見もあり、はげしい賛否両論の議論が展開されているが……。

兄秋山好古は日本陸軍の騎兵隊の創設者。そして弟真之は、あのロシアのバルチック艦隊との日本海海戦で、東郷平八郎司令長官の下で大活躍した名参謀。2人はこういう役割で既に歴史上の物語として定着しているが、『坂の上の雲』が面白いのは、弟の真之の同級生である俳人正岡子規をからめて、近代新興国家である明治ニッポンの姿を描いたところ。

若貴兄弟と秋山兄弟を対比するため(?)にも、是非この『坂の上の雲』を読んでいただきたいものだ。

『ブラザーフード』と『マイ・ブラザー』

『マイ・ブラザー』の主演は弟のジョンヒョンだが、このジョンヒョンを演ずるウォンビン、朝鮮半島の南北分断という苦難の時代の中での兄弟の絆を描いた名作『ブラザーフード』(04年)でも弟役として登場していた、名「弟」役俳優。

パンフレットにある勝田友巳氏の「ウォンビンの持ち味が最大限に発揮された力作」は、彼のはまり役としての弟役について、面白くかつ説得力をもって解説している。

『ブラザーフード』は時代背景が時代背景だけに、兄への信頼、兄への反発、敵味方にわかれての憎しみなどがきわめて劇的に表現されており、それが涙を誘ったが、この『マイ・ブラザー』は、日常生活の中に現れる兄弟の確執を描いたものだから、見ていて気楽……？

そう思って、「なるほど、なるほど」とそのストーリー展開に納得しながら観ていたが、何の何の……。ラストに向けて、とんでもない大事件が……？

わかりやすい導入部と見事な演出！

韓国映画が今、日本に受け入れられている1つの要因は、「わかりやすさ」にあると私は思っている。この映画も、「優しい女がいた。写真の好きな男がいた。

2人は愛し合い結婚して、男の子が生まれた。そして……。」というシンプルなナレーションから始まる。

問題は、最初に生まれた男の子ソンヒョン（シン・ハギョン）が生まれながらにして、唇にある疾患を持っていたこと。そして、1年後にこの子を捨てて父親が逃げ出していった時、母親（キム・ヘスク）のお腹には2人目の生命が宿っていた。なぜ母親の手ひとつで2人の男の子を育てていくことになったのかがここからわかるわけだ。そして、母親は金貸し業を営み、長男の手術代を稼ぐため非情な貸金の取り立てをしながら必死に生きてきた。

ある1枚の、家族3人が写った写真。その真ん中には、写真を撮られることを嫌がって少し顔をそむけたソンヒョンの姿が……。

そして今、成人した弟のジョンヒョンは1人である写真館の中にいた。彼が現像をするために持ち込んだのは、古い骨董もののニコンの一眼レフ。はたしてこのカメラの中のフィルムには誰のどんな写真が写っているのだろうか……？

こんな、シンプルながらも計算しつくされた演出の妙に、なるほどと感心……。

あこがれのマドンナは？

1歳違いの兄弟ながら、手術のため（？）か、高校生となった兄弟は同じクラスに。兄は学業は優秀だがひ弱で内気。これに対して弟は不良グループの番長として君臨。こんな状態だから兄弟関係においては、いつも弟が主導権を……。そんな2人に共通の「マドンナ」として登場するのは、文芸部の「高嶺の花」ミリオン（イ・ボヨン）。単純な弟は、こんなミリオンに惹かれて文芸部に入部したものの、気のきいた詩などいくら頭をひねっても書けるはずがない。しかしそんな弟はチャッカリと、兄の机の引き出しから発見した兄の書いた詩を「横取り」することによって（？）うまくミリオンをゲット……。これには、さすがにおとなしい兄も怒ったが、そりゃ当然……！

マドンナは所詮「さしみのツマ」……？

弟は頭は悪いが、ハンサムで皆の人気モノ。そんな弟がえらく気のきいた詩を朗読したのだから、ミリオンはこの弟にコロリ……。そして2人は海辺で初キ

スを……。さてこの2人の成り行きは……？ それは映画を観てのお楽しみだが、さすが一方の不良グループの番長を張っているだけあって、ジョンヒョンは立派なもので一本筋が通っている……？

他方、このマドンナは、この映画では所詮「さしみのツマ」にすぎなかったよう。しかしその取り扱いはちょっとかわいそうでは……？

兄は医学部へ、しかし弟は……？

この映画の前半は、ウォンビンとシン・ハギョンという韓国を代表する2人の俳優が学生服を着て、同じ高校内で大暴れる(?)が、いつまでも高校生でいられるわけではない。すなわち、後半からは、兄と弟の進路ははっきりと分かれてくる。

勉強に励んだ優秀な兄は、母親が希望したとおりソウル大学医学部に入学して、めでたく医者への道を歩み始め、前途洋々の未来が開けてくるが、他方弟は、浪人して予備校へ。しかも、もともと勉強ギライだから予備校通いもサボりがちで、ついつい脇道へそれがち……？

こんな風に道が分かれていく中で兄弟2人の価値観は一層離れていくことになるから、「兄弟は他人の始まり」とはよく言ったもの。さて、この2人は……？

脇役の2人が面白い！

この映画には面白い脇役が2人登場する。その1人はソンヒョンの小さいころからの友人で知恵遅れのドウシク。この2人が仲良くなったのは、やはりソンヒョンのやさしい気持をこのドウシクが感じとったためだろう。もう1人はホンモノのヤクザのヨンチュン(チョン・ホビン)。彼はミリョンの実兄で、たった1人の妹のことを心配しているため、ミリョンがジョンヒョンとつき合っていると聞いてヨンチュンは……？ つっぱり者(?)はつっぱり者同士で通じ合うものがあるのか、いつの間にかヨンチュンはジョンヒョンのことを弟分のように思うように……。他方、ジョンヒョンも、母親が不動産で失敗する中、おカネを稼ぐためにはヤクザの仕事が1番とばかりに……？ この2人の脇役が2人の兄弟のその後の人生にどんな影響を与えることになるのか、十分注目しながら映画を観

てみよう。

母親の教育方針は是か非か？

兄は生まれた時から唇に障害があったため、父親は子供を捨てて逃げ去ったほど。そんな中、1歳違いの弟も誕生した。さて母親はどうやって生きていくのだろうか？「女は弱し。されど母は強し」と昔言われたことがあったが、まさにそのとおり「母は強し」だ。

しかし、こんな状況下での、この母親の2人の男の子の育て方はかなり極端で、はっきり言えばえこひいきもいいところ……。私も男2人兄弟の弟だから、弟の気持はよくわかる……。兄弟間で、母親の愛情の注ぎ方についての不満やお互いの嫉妬心に相当強いものがあることはむしろ当然……？

この映画が観客に見せる母親の子育て論は、日本流教育の建前論からみれば、かなり「問題あり」となるはずだが……？

「バーバリー」のフード付きジャケットに注目！

予告編にも登場していたのが、兄弟で「バーバリー」のフード付きジャケットを着るシーン。これは母親が兄にプレゼントしたものだが、弟は鏡の前でそれを着ながら兄に対して、「俺とお前の違いがわかるか？ お前が着ればホンモノでもニセモノに見える。しかし俺が着ればニセモノでもホンモノに見える」と言うシーンだ。

映画ではこのシーンは比較的早い段階に登場する。そして、このジャケットは弟がいつも愛用して着ることになるのだが、後半、このジャケットが大きな意味を持つことになる。そんなところにも要注目！

2005(平成17)年6月20日記